

# 日本中東学会ニューズレター

**JAMES**  
NEWSLETTER



**No.130**  
2013/3/5

## 目 次

第 15 期（2013～14 年度）役員選挙の結果.....	2
理事会報告 .....	2
第 29 回年次大会参加申し込み等について.....	4
暫定プログラム .....	6
土佐からのフッリーヤ——第 18 回公開講演会報告 .....	13
日本中東学会年報 AJAMES 編集委員会報告 .....	16
地域研究学会連絡協議会の年次総会に参加して.....	18
追悼 アンワル・アブデルマリク（1924～2012） .....	19
寄贈図書.....	23
会員の異動.....	24
連絡先をご存じないですか .....	25
事務局より .....	25
編集後記.....	26

## 第 15 期（2013～14 年度）役員選挙の結果

2013～14 年度（第 15 期）評議員・役員選挙の結果をお知らせいたします。

評議員選挙については、2012 年 11 月 30 日開票の結果、有権者数 413 名のうち、投票者数 158 名（うち有効票 151、無効票 7、白票 0）、投票率は 38.3%でした。学会細則Ⅷ-2 により、今期の評議員は以下の 60 名で確定いたしました。

青山弘之、赤堀雅幸、秋葉淳、新井和広、飯塚正人、池内恵、板垣雄三、岩崎えり奈、岩崎葉子、臼杵陽、宇野昌樹、江川ひかり、大川玲子、大河原知樹、太田敬子、大稔哲也、岡真理、粕谷元、加藤博、私市正年、北澤義之、栗田禎子、黒木英充、小杉泰、小林春夫、小松香織、小松久男、酒井啓子、桜井啓子、佐藤健太郎、澤江史子、清水和裕、末近浩太、杉田英明、鈴木恵美、鷹木恵子、高橋和夫、立山良司、店田廣文、東長靖、内藤正典、長沢栄治、中村覚、八尾師誠、羽田正、林佳世子、福田安志、保坂修司、堀井優、松永泰行、松本弘、三浦徹、三沢伸生、森本一夫、柳橋博之、山岸智子、山口昭彦、湯川武、横田貴之、吉村慎太郎  
(50 音順、敬称略)

評議員選挙に続き、新評議員による理事選挙が行なわれ、2012 年 12 月 21 日開票の結果、以下の 15 名が選出されました。なお、理事選挙にあたり、会則第 9 条の規定により、青山弘之、大稔哲也、黒木英充、桜井啓子、東長靖、山岸智子の各評議員は被選挙権を保有しないため、予め理事候補より除外されました。投票数 46（うち有効票 45、無効票 1、白票 0）、投票率は 76.7%でした。

赤堀雅幸、飯塚正人、臼杵陽、江川ひかり、粕谷元、栗田禎子、小杉泰、酒井啓子、長沢栄治、林佳世子、保坂修司、松本弘、三浦徹、森本一夫、山口昭彦（50 音順、敬称略）

（松本弘）

## 理事会報告

### 【第 14 期・15 期合同理事会報告】

日時：2013 年 1 月 8 日（火）17:30～19:00

場所：日本女子大学目白キャンパス百年館高層棟7階マシン室

出席：赤堀雅幸、新井和広（14期）、臼杵陽、江川ひかり、大稔哲也（14期）、粕谷元、黒木英充（14期）、小松久男（14期）、酒井啓子、東長靖（14期）、長沢栄治、林佳世子、保坂修司、松本弘、三浦徹、山岸智子（14期）、山口昭彦

欠席：青山弘之（14期）、飯塚正人、栗田禎子、小杉泰、桜井啓子（14期）、森本一夫

[議題]

1. 役職・理事業務の報告と引き継ぎ

14期の各理事が、15期の理事に対して業務の報告を行った。14期から新設された役職（総務）や、業務内容が変更されたもの（ニューズレターの電子化）等については、新設の経緯や変更点などが説明された。

2. その他

特になし。

**【15期新理事会報告】**

日時：2013年1月8日（火）19:00～20:00

場所：日本女子大学目白キャンパス百年館高層棟7階マシン室

出席：赤堀雅幸、臼杵陽、江川ひかり、粕谷元、酒井啓子、長沢栄治、林佳世子、保坂修司、松本弘、三浦徹、山口昭彦

欠席：飯塚正人、栗田禎子、小杉泰、森本一夫、

[議題]

1. 会長と事務局長の選任

投票により、栗田会長と決定した。事務局長候補を検討したが、結論には至らなかった。

2. 理事の任務分掌

任務分掌について話し合い、以下の通り決定し、会員総会に諮ることとなった。

日本中東学会年報編集委員会

編集委員長：保坂修司

副編集委員長：江川ひかり、粕谷元

国際交流委員会

委員長：臼杵陽

AFMA 担当：酒井啓子

その他、担当が決まっていない役職については、次回以降の理事会に改めて話し合うこととなった。

(新井和広)

## 第 29 回年次大会（2013 年 5 月 11～12 日）参加申し込み等について

### 1. 参加および懇親会申し込みについて

日本中東学会第 29 回年次大会への参加申し込みは、参加費の振込によって行うことができます。大会への出欠通知、懇親会・弁当（昼食）の申し込みを兼ねた郵便振替用紙を送らせていただきます。大会に参加される方は、この振替用紙をご利用の上、下記の口座に、2013 年 4 月 12 日（金）までに参加費をお支払いください（研究発表に応募された方の参加費納入期限は、後述のとおり、これより早く 2 月 28 日（木）です）。



発送作業の様子

また、懇親会費、2 日目（5 月 12 日）の弁当代などの納入も同じ振替用紙をご利用ください。なお、弁当の当日申し込みはお受けできません。諸費用は前納でお願い申し上げます。

参加費は 1,000 円、懇親会費は 5,000 円（学生会員は 4,000 円）、2 日目弁当代は 1,000 円です。なお、事前にお振込いただいた諸費用は返却に応じかねますので、ご注意ください。

振込先（郵便振替口座）

口座番号 00950-2-328575

口座名称 日本中東学会第 29 回年次大会実行委員会

### 2. 大会会場の変更について

これまで 2 日目の会場を箕面キャンパス（旧大阪外国語大学）としていましたが、交通の便を考慮して再検討をした結果、次のように変更することにしましたので、ご注意ください。

5 月 11 日（土）大学会館（大阪大学豊中地区） 変更なし

5月12日(日)箕面キャンパスA棟 → 文・法・経済学部研究講義棟(豊中地区)

新会場は初日会場の大学会館から歩いて数分の、ほとんど直線的な距離にあります。途中変更となりますが、運よく新会場の確保ができましたので、よろしくご了解をお願いいたします。

豊中キャンパスへのアクセスについては

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka/files/All.pdf> をご参照ください。

### 3. 託児所の設置について

大会当日に託児所の利用を希望される方がおられましたら、準備の都合上、早めにご連絡ください。最終的な締切は2013年4月12日(金)の予定です。

託児所の費用については、託児所会計の前年度からの繰越金を充当する予定ですが、利用者の方に利用時間に応じて多少のご負担をお願いいたします。

### 4. 研究発表について

2日目(5月12日)の研究発表につきましては、個人発表51件、企画セッション2件の応募がありました。多数のご応募をいただき、誠にありがとうございます。実行委員会では大会の暫定プログラムを作りました。ただし、今後発表予定者の都合などによる変更の可能性があります。よろしくご了解ください。

最終的なプログラム、会場への交通案内、総会議決の委任状などは4月上旬にお手元にお届けする予定です。なお、年次大会の開催時期は、ゴールデンウィークの翌週ですが、宿泊につきましては以下のサイト等をご覧頂き、お早めにご予約をお願いいたします。とりわけ発表予定の方におかれましては、十分余裕を持って宿泊予約をされることを強くお勧め致します。

○じゃらん net <http://www.jalan.net/ikisaki/map/oosaka/index.html>

○楽天トラベ <http://travel.rakuten.co.jp/>

### 5. 研究発表予定者の方へ

発表予定者の方は、2月28日(木)<sup>1</sup>までに、(1)大会参加費の振込と(2)発表要旨原稿の提出をお願いいたします。期日までにこの二つの条件が満たされない場合は、発表をお断りすることがありますのでご注意ください。

なお、(3)上記期日までに、学会への入会手続きを完了し、2013年度までの

---

<sup>1</sup> 本ニューズレターの発行日は2013年3月5日(火)であり、既に納入期限を過ぎております。各発表予定者の方へは個別にメールでも連絡させていただいておりますが、学会事務局の不手際でこのような事態になりましたこと、お詫び申し上げます。

会費を納入していることも発表資格条件の一部として定められております。期日までにこの条件が満たされない場合は、発表をお断りすることがありますので、ご注意ください。(海外在住などのために参加費の振り込みに困難が生じる方は、別途ご相談ください。)

#### 【発表要旨執筆要項】

1. 要旨は大会当日配布される要旨集に掲載します。
2. 分量は、日本語による発表の場合、和文 1,000 字以内、英語による発表の場合、英文 350words 以内とします。
3. 日本語による発表の場合、英文タイトル・英文要旨 (350words) を、英語による発表の場合、和文タイトル・和文要旨 (1,000 字以内) もつけてください。
4. 和文、英文とも発表タイトル、氏名、所属 (大学院生の場合はその旨を必ず明記のこと)、要旨本文の順序で書いてください。ただし、所属の書き方等、書式は統一性を保つため、こちらで編集する場合があります。フォント、行数等についてもこちらで決定します。
5. 英文のブラッシュアップ、ネイティヴ・チェックは大会実行委員会では行いません。各自の責任で行ってください。
6. アラビア文字転写などの特殊文字は用いないでください。
7. 書式なし (シンプル・テキスト) のファイルで、E-mail に添付して、大会事務局のアドレス [james2013osaka@gmail.com](mailto:james2013osaka@gmail.com) に 2月28日(木) までにご送付ください。

#### 暫定プログラム

〈第1日目・2013年5月11日(土)〉豊中キャンパス 大学会館講堂

13:30~17:00 公開イベント

第1部: 「中東研究における言語教育を考える—学ぶ立場と教える立場—」

内容: 阪大外国語学部のように専攻語として教育しているケースの教育の現状や新動向 (アラビア語等)

研究者には不可欠な研究用の言語教育の事例 (オスマン・トルコ語とか、アラビア語パレスチナ方言) における経験と模索

言語研究以外の専門家からの提言やコメント

第2部: 「語りの文学」

内容: 上方講談師・旭堂南海氏による書き下ろし講談

17:30~18:30 日本中東学会総会

18:45~20:45 懇親会 (会場: 学生交流棟カフェ&レストラン「宙」)

◆ 企画セッション (13:00~17:00)

- (1) イラン映画とその社会的背景についての総合的研究(鈴木均・日本貿易振興機構アジア経済研究所)

鈴木均「イラン映画史の批判的検討: イラン人による自画像」

貫井万里「欧米におけるイラン映画研究の動向(仮)」

ケイワン・アブドリ「資本とイラン映画: 政府・製作会社とイラン映画産業の発展」

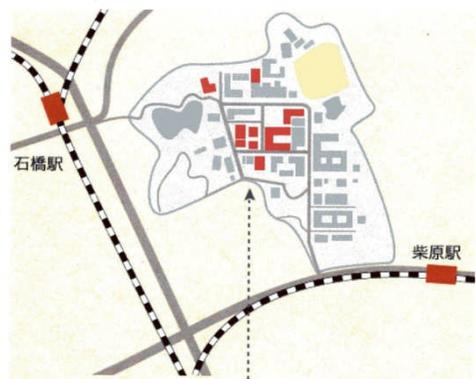
- (2) *Energy, Security, and Reform ; Political and Social Challenges in the Gulf after the "Arab Spring"* (Koji Horinuki・JIME Centre)

Steven Wright "Sustainability in Energy Consumption and Supply in the Arabian Gulf : A Case Study on Saudi Arabian Fiscal and Energy Policies"

Abdullah Baabood "New Security Challenges to the Gulf States(GCC) : in the Light of Arab Spring"

Koji Horinuki "An Independency in a State of Dependency: Socio-Economic Challenges in the Northern Emirates"

豊中キャンパスMAP



豊中キャンパス図

第1日目会場は1、第2日目会場は6

◆ 個人研究発表

第1部会

9:00~9:40 小笠原弘幸 (東洋大学)

「「愛国」なき国民史—オスマン帝国アブデュルハミト2世専制下における歴史教科書の分析」

9:40~10:20 宇野陽子 (津田塾大学)

「抵抗運動から国民開放戦争へ—第一次世界大戦後オスマン帝国における政

治団体の多様性とその糾合（仮）」

10:30～11:10 秋葉淳（千葉大学）

「カーディーの町・カーディーの村 18～19 世紀初頭オスマン社会における支配者参入の道」

11:10～11:50 奥美穂子（明治大学 J）

「16 世紀オスマン帝国の『王の祝祭』にみる贈与と返礼—贈物供出から恩賞授与、国庫納入の過程まで—」

13:00～13:40 鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）・鷺見克典（名古屋工業大学）

「アラビア語学習者における動機づけ、志向、アラブ文化への興味—アラビア語専攻、非アラビア語外国語専攻、非外国語専攻学生の比較（仮）」

13:40～14:20 竹田敏之（京都大学）

「イスラーム復興と現代アラビア語の展開:ハムザの表記をめぐる論争とその政治社会的背景」

14:30～15:10 アルモーメン・アブドーラ（東海大学）

「アラビア語慣用的表現の分類—意味による分類とその応用の試み」

15:10～15:50 川本智史（東京大学 J）

「イスタンブル旧宮殿の研究」

## 第 2 部会

9:00～9:40 今野毅（札幌学院大学・北海学園大学）

「アルバニアにおけるイスラーム化とジズヤ 15～18 世紀オスマン財政文書からの再検討（仮）」

9:40～10:20 OH Eun-Kyung (Dongduk Womens University)

“A Comparative Study on Epic Poems in Turkic Countries and Korea”

10:30～11:10 松尾有里子（お茶の水大学）

「16～17 世紀オスマン朝治下のボスニア・ヘルツェゴビナ サラエヴォとモスタル法廷の記録を中心に」

11:10～11:50 杉本悠子（早稲田大学 J）

「19 世紀シリアにおける地方名士の権力基盤—アレppo、カワーキビー家を例として」

13:00～13:40 錦田愛子（東京外国語大学）・溝渕正季（日本学術振興会）・高岡豊（公益財団法人中東調査会）・濱中新吾（山形大学）

「レバノン在住パレスチナ人にみられる越境移動と政治意識—2012 年世論調

査に基づく比較分析」

13:40～14:20 鈴木啓之（東京大学 J）

「パレスチナにおける抵抗運動と国際関係ーキャンプ・デーヴィッド合意の衝撃（仮）」

14:30～15:10 金城美幸（立命館大学）

「パレスチナ人のナクバとオーラル・ヒストリー ビレッジ・ブックスの考察を中心に（仮）」

15:10～15:50 清水雅子（上智大学 J）

「非民主制下の競合的選挙と権力共有政権 パレスチナ国民協同合意に伴う政治過程とその膠着（仮）」

### 第3部会

9:00～9:40 辻上奈美江（東京大学）

「「アラブの春」はジェンダー再編をもたらすか」

9:40～10:20 YOON Hee-Jung (Dongguk University) PARK Jung-Ha (Baekseok University)

“Effects of Bicultural Stress on Mother-Child Communication of Immigrant Muslim Women”

10:30～11:10 李知妍（大阪大学 J）

“The Current Kwaiti Girls’ Education through the School Text Books”

11:10～11:50 野中葉（慶応義塾大学 J）

「インドネシアにおけるイスラーム短編小説の広がり と女性たちのイスラーム覚醒」

13:00～13:40 登利谷正人（上智大学 J）

「アフガニスタン国境地域を巡るアフガニスタン・英領インド間関係について（仮）」

13:40～14:20 塩崎悠輝（同志社大学）

「ジョホールのムフティ、サイイド・アラウィー・アル=ハッダードとサラフィーをめぐる論争-1930年代の東南アジアにおける法学論争と中東からの影響-」

14:30～15:10 Victor Barrasso（大阪大学 J）

“Ornamental and Agricultural Areas In Andalus: Andalusí *Munya*, the Object of Desire”

15:10～15:50 勝沼聡（東京大学）

「近代エジプトにおけるナイルの氾濫とその対応（仮）」

#### 第4部会

9:00～9:40 吉村貴之（東京外国語大学）

「第一次大戦後のアルメニア「祖国帰還」運動と在外コミュニティ」

9:40～10:20 近藤信彰（東京外国語大学）

「サファヴィー朝後期の中央・地方関係—『王達の慣わし』新写本に基づいて」

10:30～11:10 横内吾郎（京都大学）

「書物に伝存するウマイヤ朝期の書簡群に関する一考察」

11:10～11:50 小野仁美（学習院女子大学）

「古典イスラーム法にみられるジェンダー規範」

13:00～13:40 SEO Jeong-Min (HUFS)

“Tribalism and the Arab Political Change”

13:40～14:20 武田歩（一橋大学 J）

「トランス・ローカル化するディアスポラ・コミュニティ:ドイツのクルド系移民を事例に（仮）」

14:30～15:10 佐藤麻理絵（京都大学 J）

「ヨルダン首都アンマンにおける難民受入と都市の変容」

15:10～15:50 小阪裕城（一橋大学 J）

「アメリカ・ユダヤ人委員会（American Jewish Committee）と国際人権 1945～1948」

#### 第5部会

9:00～9:40 武石礼司（東京国際大学）

「中東湾岸 GCC 経済の現状と課題—オイルバブルと発展」

9:40～10:20 LEE Kwon-Hyung (KIEP)・SON Sung-Hyun researcher (KIEP)

“Emerging Islamic Project Finance and Its Policy Implications for Korea”

10:30～11:10 上山一（筑波大学）・臼杵悠（一橋大学 J）

「ヨルダンのイスラーム金融利用事情—2010年の顧客調査から—」

11:10～11:50 YOON Ki-Kwan (ChungNam National University)

“A Study on the Drawing Korea-Middle East Countries FTA Agenda”

13:00～13:40 川村藍（京都大学 J）

「ドバイ・アプローチの先進性—イスラーム金融における民事紛争処理制度を

めぐって (仮)」

13:40～14:20 近藤重人 (慶応義塾大学 J)

「サウディアラビアの石油政策とパレスチナ問題, 1945～1949 年」

14:30～15:10 横田吉昭 (東京大学 J)

「1950 年代トルコ共和国の漫画の展開に現れた文化観の転換—国民国家建設期の「国民」文化から「大衆」文化へ (仮)」

15:10～15:50 岩坂将充 (日本学術振興会)

「トルコにおける司法の変化と「エリートの政治文化」—1980 年クーデタ以降の憲法裁判所を中心に (仮)」

## 第 6 部会

9:00～9:40 店田廣文 (早稲田大学)

「日本のムスリム・コミュニティと地域社会—福岡県福岡市における「外国人住民との共生に関する意識調査」調査結果より」

9:40～10:20 岡井宏文 (早稲田大学)

「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識—福岡県福岡市調査の事例より」

10:30～11:10 石川基樹 (早稲田大学)

「地域住民におけるイスラーム・ムスリム意識の規定要因—福岡・富山・岐阜調査の事例より」

11:10～11:50 嶺崎寛子 (愛知教育大学)

「ディアスポラの信仰者—日本におけるアフマディーヤ・ムスリムのアイデンティティ」

13:00～13:40 小島宏 (早稲田大学)

「滞日ムスリムにおける第 2 世代教育に関する期待・不安の関連要因」

13:40～14:20 小村明子 (上智大学)

「宗教団体によるボランティア活動の在り方とその課題」

14:30～15:10 KIM Joong-Kwan (Dongguk University)・YANG Kyung-Su (Dongguk University)

“Social Assimilation Effects on the Korean Muslim Expatriates”

## 第 7 部会

9:00～9:40 森田豊子 (鹿児島大学)

「現代イランの家族保護法をめぐる議論 (仮)」

9:40～10:20 KO Gi-Yeon (Seoul National University)

“Making Their Own Public: Emotion and Self among the Privileged Iranian Youth”

10:30～11:10 貫井万里 (慶応義塾大学)

「アメリカの対イラン政策と1953年8月クーデター事件」

11:10～11:50 CHANG Byung-Ock (Hankuk University of Foreign Studies)

“The development of Iranian Studies in Korea”

13:00～13:40 ガッファリ・ゴルゼイン・ホセイン (龍谷大学 J)

「イランの石油国有化運動と日章丸事件の考察」

13:40～14:20 JEONG Young-kyu (Graduate School of HUFSS)・KANG Mu-Hee (Hyupsung University)

“Iran's Current Economic Situation and Korea's Strategy for Expanding Cooperation with Iran”

14:30～15:10 Dimitar M. Dimitrov (一橋大学 J)

“Qatar's Branding and Positioning in the World of Football”

15:10～15:50 今井真士 (日本学術振興会)

「連立政権論の再検討—中東地域における新政権の樹立」

## 第8部会

9:00～9:40 近藤洋平 (東京大学)

「イバード派イスラーム思想における入信、改宗とコミットメントの議論(仮)」

9:40～10:20 篠田知暁

「15-16世紀シャーズィリー教団ジャズーリー派の枢軸位継承について」

10:30～11:10 松山洋平 (東京外国語大学 J)

「マートゥリーディー学派の研究の射程と今後の課題」

11:10～11:50 遠藤春香 (京都大学 J)

「シャアラニーによるイブン・アラビーの弁護・超越性と内在性の議論をめぐって(仮)」

13:00～13:40 Prof. AHN Sang-Joon (SAOT College)

“An Evaluation of Islam in the Korea Religions”

13:40～14:20 福永浩一 (上智大学 J)

「ムスリム同胞団形成に至るハサン・バンナーの活動と思想展開に関する考察—バンナー回想録と初期同胞団原則集の内容分析を中心に」

14:30～15:10 若桑遼 (上智大学 J)

「保護領統治下チュニジアにおけるナショナリズムの生成と『帰化問題』」  
15:10～15:50 小野亮介（慶応義塾大学 J）

「オーレル・スタインとの交際からみるゼキ・ヴェリディ・トガンー1932-33  
年を中心に（仮）」

大会についてのお問い合わせはこちらまで

連絡先

日本中東学会第 29 回年次大会実行委員会事務局

〒572-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1 大阪大学言語文化研究科

近藤久美子研究室気付

Tel & Fax 072-730-5305

E-mail: [james2013osaka@gmail.com](mailto:james2013osaka@gmail.com)

（可能な限りメールでご連絡・お問い合わせいただければ幸いです）

（近藤久美子）

## 土佐からのフッリーヤ—第 18 回公開講演会報告

2012年10月27日（土）、高知市中心部にある高知新聞放送会館・高新文化ホールにて日本中東学会第18回公開講演会「交感する『自由』—近代のイスラーム世界と日本、そして今」が開催されました。本講演会では、現代の中東と日本の社会状況を参照しながら、19世紀後半から20世紀初めに両地域で熱く語られた「自由」の今日的な意義について議論しました。残念ながら当日の聴講者は30名程度に留まったものの（聴衆の主体を学校教員としていたのですが、当日は学校行事が集中する日だったようです）、時代を超えて交感する「自由」について活発な議論が展開されました。各講演の主なポイントは以下のとおりです。



### 【「自由」と「フッリーヤ」】

2011年初めからアラブ諸国で連鎖的に発生してきた市民的革命運動は、現在もなお世界の注目を集めています。そこで共通して叫ばれてきたキーワードが「自

由」、アラビア語の「フッリーヤ」でした。冒頭で黒木英充会員より、講演会趣旨として「フッリーヤ」と「自由」の意味の変遷についての説明がありました。

「フッリーヤ」はもともと「奴隷」に対する「自由人」の立場を表すイスラーム法の言葉に由来しますが、近代になって植民地支配からの「解放」の意味で使われるようになりました。一方、日本語の「自由」は、言葉の成立当初は「不自由さからの解放」あるいは「わがまま」とか「気まま」といった意味があったとされています。「自由」が最初に政治的な問題となったのは明治の自由民権運動の時期でした。

### 【高知の自由民権運動とアジア主義】

最初に高知県立大学ジョエル・ヨース准教授より、「自由民権運動とアジア主義——植木枝盛の「東洋」はどこだったのか」と題する講演が行われました。高知は自由民権運動の発祥の地ですが、その運動の記憶が良く保全されている地でもあります。それはその記憶を積極的に残し、継承しようとする働きかけがあってこそである、との指摘がありました。そのうえで自由民権運動を世界史の中に位置づけることを目指す立場から、自由民権運動・思想は大きな多様性を持ち、時代とともに変化するだけでなく、同時代においても様々だったこと、さらに時代や地域を越えて比較可能であることが指摘されました。ヨース氏が中心的に取り上げた自由民権思想家の植木枝盛(1857-1892)は、初期のアジア主義提唱者でアジア諸民族との平等な連帯を求めました。のちにアジア主義は日本の権益拡大に向けた帝国主義的性質を帯びていきますが、植木枝盛や犬養毅らの存在は、自由主義的なアジア主義という、自由民権運動が生み出した一つの可能性を示すものだったと言えます。

同時にヨース氏は、自由民権運動の時代では、新しいメディアの誕生が運動の隆盛と思想の普及を助け、そしてまた思想への渴望がメディアの普及を助けたことを「アラブの春」との類似点として指摘しました。



### 【韃靼の志士と明治の日本】

つづいて中東学会会員で東京外国語大学の小松久男氏より「韃靼の志士と明治日本——時代の空気を読む」と題する講演が行われました。小松氏が取り上げた「韃靼の志士」とは、明治42年(1909年)に日本を訪れた、ロシア生まれのタタール人ムスリム、アブデ

ユルレスト・イブラヒム（1857-1944、植木枝盛と同年の生まれ）です。彼は、日露戦争に勝利した日本を列強による支配からの解放を望むイスラーム世界の盟友と認め、日本のアジア主義者たちと親交を結びましたが、このことは日本とイスラーム世界との初期の出会いとして認識されています。

講演では、イブラヒムの日本紀行を収めた著書『イスラーム世界』と日本のジャーナリズムの記事との比較が行われました。そこで明らかになったのは、イブラヒムは旅行記の中で日本におけるイスラームの普及の可能性と重要性を強調したのに対して、日本側はイブラヒムを亡国の旅行家、しかし発展する日本をよく理解し、ヨーロッパに対抗してアジア諸民族の連合を実現するために奮闘する「鞭撻の志士」と認識していたことでした。一旦は日本を離れたイブラヒムでしたが、1917年のロシア革命とアタテュルクによるトルコ革命によって疎外され、1933年に再来日を果たすと日本発のタタール語雑誌『新日本通報』に論説「アル・ジハード（聖戦）」を寄稿し、1938年5月に落成した東京モスクのイマームとなって日本の対イスラーム政策に協力しました。

#### 【大川周明のアジア主義へ】

白杵陽会長からは、植木枝盛の次の世代に当たる大川周明(1886-1957)に焦点を当てたコメントがありました。太平洋戦争後民間人で唯一のA級戦犯とされた大川周明の考えるアジア主義は、植木枝盛の考えた自由主義的なアジア主義からは大きく変貌を遂げた国家主義的なものでした。大川周明は、日本の文化と歴史は、アジア全地域のさまざまな文化遺産を受容し、その諸遺産を総合することで成り立っているという立場を取りました。とりわけ第一次世界大戦が終わると、ヴェルサイユ＝ワシントン体制を打破するために、帝国主義への対抗の場としてのアジア主義が掲げられ、昭和維新が目指されました。

大川周明の大東亜共栄圏構想のなかで無視できない存在となったのがアジアのムスリムでした。大川周明は1942年に『回教概論』や、クルアーンの翻訳『アル＝クルアーン』を出版し、アジアのムスリムについての知識が必須になったと訴えます。しかし、日中戦争が太平洋戦争へと発展し、次第に大東亜共栄圏構想は破綻へと導かれました。



### 【「アラブの春」の「自由」の多様性】

辻上奈美江会員のコメントは、現代の中東地域で起こる「アラブの春」の「自由」の多様性について、エジプトとサウディアラビアの事例から検討するものでした。30年にわたるムバーラク政権を転覆させたエジプトでは、人びとは自由と社会的公正、そして尊厳を求めました。とりわけ政権内の腐敗、物価の上昇や貧困率の高さに加えて厳しい言論統制に不満を抱いていた民衆にとって、自由が希求されたのです。

他方で、民衆によるデモが沈静化したサウディアラビアでは、自由や民主化を求める声はそれほど大きくはありませんでした。自由や民主化が欧米化を招くと危惧する声があるのと同時に、混乱が続くエジプトのようにはなりたくないという声も聞かれました。

自由民権運動やアジア主義は時代が進むに連れて変化していきましたが、「アラブの春」についても、多様な発生形態や政治社会的背景があり、必ずしもひとつの形態の自由が求められたわけではなかったと言えるでしょう。

### 【自由の意味の再検討と歴史教育】

ヨース、小松、臼杵、辻上の各氏によるパネルディスカッションでは、「自由」という概念をめぐる、それぞれの時代と地域における位置づけが、今日の世界における新自由主義も射程に入れて議論されました。またフロアからの質問に応じて、世界人口の5人に1人がムスリムである時代、世界史教育のあるべき方向についても議論が及びました。

(辻上奈美江・黒木英充)

## 日本中東学会年報 AJAMES 編集委員会報告

『日本中東学会年報』(AJAMES) 編集委員会より、ご報告いたします。

### 1. 28-2号が刊行されました

まもなく28-2号をお届けします。皆様のご協力でたいへん充実した号となりました。掲載論考は以下のとおりです。

#### ■論文

FUJII Chiaki, "New" Traditional Medicine on the East African Coast: The Practice of Prophetic Medicine in Zanzibar

CHOI, Chang-Mo , A Reflection on Arabia-Africa in the Mappa Mundi of the Chosŏn Dynasty: A Study Based on the Honil kangni yŏktae kukto chido (混一疆理歷代國都之圖), or The Unified Map of Territories and Capitals of the States of 1402

■特集 New Trends in Japan's Study of the Middle East: Searching for Roots

KATO Hiroshi, Preface

USUKI Akira, A Japanese Asianist's View of Islam: A Case Study of Ōkawa Shūmei

TANADA Hirofumi, Islamic Research Institutes in Wartime Japan: Introductory Investigation of the "Deposited Materials by the Dai-Nippon Kaikyo Kyokai (Greater Japan Muslim League)"

MISAWA Nobuo and ŌSAWA Kōji, Japanese opinions about Islam before and during World War II: Articles related to Islam in Chūgai Nippō , Buddhist Daily Newspaper (1937-45)

NUMATA Sayoko, Fieldwork Note on Tatar Migrants from the Far East to the USA: For Reviews of Islam Policy in Prewar and Wartime Japan

■研究ノート

SAKAI Keiko, Analysing "Arab Uprisings": Focusing on the Relations between Ruling Elite Coalitions and Street Protest Movement

■研究動向

MIURA Toru, The Middle East in Studying and Teaching World History in Japan

■書評

MIZOBUCHI Masaki, "TAKAOKA Yutaka, The Roles of Tribes in Contemporary Syrian Politics and Society: An Analysis of the Tribes in the Euphrates River Region and al-Jazeera Region"

KURODA Ayaka, "NAGASAWA Eiji, Egyptian Revolution: Causes and Consequences Jewish Egyptian Marxists and the Palestine Question"

2. 去る12月1日に、29巻1号への投稿が締め切られました。論文8本、研究ノート3本、書評4本の投稿をいただきました。これをもとに、現在29巻1号にむけての作業が続いています。刊行は、本年7月の予定です。

### 3. 投稿原稿締切のお知らせ

次回 29-2 号への投稿締切は 6 月 1 日です。論文、研究ノート、書評、特集などの投稿をお待ちしております。またこれまでたびたびお願いしておりますように、本誌は会員の研究成果の国際的な発信の場となることをめざしております。特に欧文での投稿をお待ちしております。

### 4. 中東関係博士論文欧文要旨についてのお願い

中東学会年報には毎号、中東関係博士論文欧文要旨が掲載されています。近年中に博士号を取得された方でまだ投稿されていない会員の皆様、是非、ご投稿をお願いします。こちらは、随時受付けの上、近刊号に掲載いたします。

### 5. 編集委員長の交代

まもなく発足する第 13 期理事会の準備会において、保坂修司新理事、粕谷元新理事と私（林）の 3 名が AJAMES を担当し、保坂修司新理事が 4 月より編集長を務めることが決まりました。粕谷理事が編集担当副編集長、林が特集及び科研担当副編集長を務めます。編集委員についても、任期満了に伴い、若干名の変更が予定されています。詳細は次号のニューズレターにてお知らせしますが、引き続き AJAMES 編集委員会へのご協力を、よろしくお願いします。

### 6. 本誌に関するお問い合わせ

3 月末までの本誌に関するお問い合わせ先は [ajames@tufs.ac.jp](mailto:ajames@tufs.ac.jp) です。4 月以後については、おってご連絡いたします。

(林佳世子)

## 地域研究学会連絡協議会の年次総会に参加して

2012 年 12 月 2 日、立教大学池袋キャンパスで地域研究学会連絡協議会の年次総会が行なわれた。日本中東学会は協議会の立ち上げから深く関与してきており、報告者も事務局を担当するなどしてきた。現在の事務局長は立教大学の竹中千春氏であり、それを支える 6 幹事学会には、依然として日本中東学会が含まれている。今回の総会に喫緊の課題はなく、全般に情報交換と議論の場となった。総会では、活動報告や会計報告ののち、ニューズレター第 6 号の刊行報告と 7 号の原稿依頼、日本学術会議・地域研究委員会の田中耕二氏からの書面による報告、地域研究コンソーシアムから山本博之氏の書面による報告などがなされた。その後、地域研究の今後の在り方をめぐ

って、全参加学会からから報告がなされたが、同じく協議会に加わる学会であっても、研究者以外の市民の参加度合いなど、その実態はかなり多様であり、お互いにかなり有効な情報交換の機会となった。その中で、中東を対象としながらアジア諸国などとも交流を継続している点に、日本中東学会の個性があるということも再認識させられた。なお、ニューズレターは下記の URL から全てダウンロードできます。

<http://www.jcas.jp/asjcasa/jcasa-newsletter.html>

(大稔哲也)

## 追悼 アンワル・アブデルマリク (1924～2012)



20 世紀エジプトの批判的知性を代表する社会科学者・政治思想家アンワル・アブデルマレクが、2012 年 6 月 15 日夜、パリの病院で亡くなった。私は、仕事上の関心事、世界の眺め方、人生の生き方などで彼と意気投合するところがあり、長年にわたり親しく付き合った。

### انور عبد الملك

私はパリやヘリオポリス（マスル・エルゲディダ）の彼の住居を時折訪れて母と息子の絆もよく知っていたし、東京のわが家で中東戦争勃発のニュースに接することになった彼は、八ヶ岳では板垣小屋滞在を愛でて信玄ランド（彼の呼称）の鱒の唐揚げを世界に吹聴したりしてくれた。彼の最後の来日は 2007 年 2 月東京での「第 5 回イスラム世界との文明間対話セミナー」の折の 10 日間ほどで、近年は年賀メールやなでしこジャパン W 杯優勝祝賀メールが舞い込む程度にとどまったが、双方で、1970・80 年代をはさむ四半世紀余の濃密な相互啓発的協力の記憶をおのおのの財産として、温め続けてきたと思う。

彼の生涯をかけたテーマは、アラブの政治・文化的復興（ナフダ）であり、民族主義（ワタニーヤ）と社会主義（イシュティラーキーヤ）の将来だった。進歩的コプト知識人の家庭に生まれ、イエズス会の学校に通ったが、早くからマルクス主義に触れエジプトのコミュニズム（シュユーイーヤ）運動の青春を燃焼させた。イスクラ運動（別称「旗（ラーヤ）」）が合流した民族解放民主運動（ハディーートゥ）を、国連パレスチナ分割決議・パレスチナ戦争を機にヘンリ・クリエルらユダヤ人指導部と対立して、シュフディ・アティーヤ・アッシャーフィイーとともに革命的ブロック（アル・クトラ・アッサウリーヤ）を結成し割って出るなど、した。やがて 1952 年エジプト革命で王政が倒れ、自由将校団の権力出現。ス

ターリン主義とシオニズムに対峙し、英米支配と軍事政権の狭間で反帝国主義の突破口を模索する、誰もがどの道を選んでも苦々しい袋小路に突き当たるばかりの政治を耐える修練をつうじて、現実洞察のカンを磨いた。ナセル政権の追跡を逃れフランスに脱出するが、アインシャムス大学で学んでいた哲学を基礎にソルボンヌで社会学の学位を取得、フランス国立科学センターCNRS でアカデミックな仕事の間を得た。

1960年代、彼の名はたちまち世界の学界で知れわたる。*Égypte, société militaire*, Paris, Le Seuil, 1962. の著作と *L'orientalisme en crise*, Diogenes 44, 4e trimestre, 109-142, 1963. の論文とが、まずその走り。前者はエジプト革命研究の視点と枠組を提示し、批判的な目を保ちながら軍人たちの政権の積極的側面を評価した。後者はのちに有名になるE. サイードの *Orientalism*, 1978 を先導したもので、アンワル・アブデルマレクを顧慮せずにもっぱらサイードを持ち上げる軽佻浮薄の言説が世にはびこるのは、嘆かわしいことだ。これらは、ちょうど同じ時期に、私が模索していた問題だった。引き続いて、彼はアラブ民族主義の政治思想史的研究の基礎的成果を矢継ぎ早に発表する (*Anthologie de la littérature arabe contemporaine*, Paris, Le Seuil, 1965. *Idéologie de la renaissance nationale: l'Égypte moderne*, Paris, Anthropos, 1969. *La pensée politique arabe contemporaine*, Paris, Le Seuil, 1970.)。こうして彼は、CNRS で研究指導者の安定した地位を獲得した。

ここで、彼の研究作業の歩みと意欲的な課題の目論見とを多様多彩な展開図として示す仕事がまとめられた (*La dialectique sociale*, Paris, Le Seuil, 1972.)。注目されるのは、近代性・近代化に関して一般性と特殊性／内発性と外因性／などを検証しつつ、地域の (geo-) 社会・経済・文化の自律的發展を保証するオルタナティブの観点から西洋中心主義を克服する、そのために第三世界 (アジア・アフリカ・ラテンアメリカ) 文明における内生的・創造的 (知) の活性化を志向する動機・方法の転換が自覚化されたことである。マルクス主義もそうした民族解放に資するものとして変わらなければならない。それは、エジプトやアラブ世界におけるマルクス主義のあり方に対する厳しい批判・反省に裏付けられており、のちに「イスラーム復興」などとして問題にされることを早期に予見的に先取りし、「政治的イスラーム」再評価という方向で考えはじめるのである。それと関連して、彼はイスラエル国家を帝国主義・ファシズムの論脈で批判する点で、1947～49年の初心を曲げなかった。「ルック・イースト」を先取りする「東からの薫風 Rih al-sharq」として東アジア (ことに中国や日本) への憧れをつよめる。以上の課題関心は、1980年代以降にアラビア語の著作や論説として提示される仕事へとつながっていき、さらには晩年の「アル・アフラム」コラム執筆者としての一般読者への問いかけにまで連綿と持ち越されていくのだ。

なお、彼の東方への憧れは、ケンブリッジ大学で「中国の科学と文明」の壮大なプロジェクトを主宰するジョゼフ・ニーダムに、1970年代、彼が傾倒していったのとも深く関係していた。スコットランド人ニーダム（1900～95、中国名は李約瑟 Li Yue Se）は、もともと生化学者。中国語を学び、抗日戦下の重慶で科学顧問。20世紀後半をつうじてケンブリッジで「中国の科学と文明」研究プロジェクトを指導した。ユネスコ設立に尽力した彼は、レヴィ・ストロースとともに「人種」を学術用語から除外せよと主張。革命中国との関係強化に奔走し、朝鮮戦争で米国がつかった生物化学兵器を調査するなどしたので、英国では彼のことを中国最悪で政治偏向の学者と酷評する者もいたが、本人は文明研究の本道を歩むと自負してひるまなかつた。私は、1960年代前半、東大東洋文化研究所で中国法制史の大家、仁井田陞（ニイダ・ノボル 1904～66）からさんざんニーダムの話を聴いていたので、アンワルのニーダム詣での必然性は理解できた。仁井田先生はニーダムに会うため英国に出かけて病気となり、亡くなった。ニーダムに師事した英国人、ケンブリッジ大学出身、マーティン・バナール（1937年生まれ）が、中国政治思想研究から出発して米国コーネル大学で教えつつ「西洋古典」概念を転覆する研究に進み、世を驚かす著書『ブラック・アテナ 古代ギリシア文明のアフロ・アジア的ルーツ』第I巻「古代ギリシアの捏造 1785～1985」（1987年刊）を準備していた過程で、アンワルは私にその研究の進捗概況の内密情報を知らせてくれた。古代ギリシアがヨーロッパの文化的祖先などでなく、エジプト・フェニキア文明の出店で、ひろびろとした古代オリエント世界の一角だったのであり、19世紀に出現する人種主義的「アーリア・モデル」のあだ花が進歩／ロマン主義／白人の優越／観念を操って人を騙し歴史を偽造したのを見破り、ヘロドトス流「古代モデル」の修正再構築が必要だ、というバナール説の形成に、私はその西洋中心主義駁撃に励まされ、遥かに声援を送ったものだ。

マーティンの父、ジョン・デズモンド・バナール（1901～71）は、ケンブリッジ大学の物理学者（『歴史における科学』[邦訳、みすず書房、原著は一九五四年]）。アイルランド出身のユダヤ人とされた彼は思想的に共産主義をつらぬき、ジョリオ・キュリーを継いで世界平和評議会議長となり、レーニン平和賞を受賞。息子マーティンが知識・学問と政治との関係をつよく意識するのは、この父と師ニーダムとの影響あつてのこと。母マーガレット・ガーディナー（1904～2005）は反ファシズムの前衛詩人・美術家サークルの一員で、彼女の母の両親は北欧フィンとハンガリー・ユダヤ人、父つまりマーティンの祖父は著名な古代エジプト学者（『エジプト語文法』[1927年、オックスフォード大学出版] 著者）サー・アラン・ガーディナー（1879～1963）だった。マーティンは、米国で東欧出身のユダヤ系考古・言語学者サイラス・ゴードン（1908～2001）やマイケル・アストゥア

(1916～2004) から、「アリア・モデル」やシオニズム史観を撥ねつける視角（レヴァントとギリシアを連結する見方）を学んでもいた。アンワル・アブデルマレクは、彼のパレスチナ問題観のために、エジプトからフランスに移ったユダヤ人 коммуニスト（「ローマ・グループ」）らから反ユダヤ主義的と非難されていたが、彼のマーティン・バナールとの親交・協同は、そんな非難が当たっていないことを物語るものだ。

アンワルは、1976年～86年の間、東京の国連大学でプロジェクト・コーディネーターを務めたので、彼の仕事の幅も、アカデミックな組織者としての立場も、俄然拡大した。1975年発足したばかりの国連大学で、彼が担当したプロジェクトは Socio-cultural Development Alternatives in a Changng World (SCA) と呼ばれるもので、Transformation of the World を Science and Technology / Economy and Society / Culture and Thought / Philosophy and Religion / History and International Relations / Civilizational Prospectives / の6サブプロジェクトからなるグローバル規模の共同研究として運営するという大掛かりなものだった。その最初のまとめのイベントは1979年10月下旬の5日間ユーゴスラヴィアのベオグラード大学で開催された会議で、その記録は *Science and Technology in the Transformation of the World*, ed. by Miroslav Pecujlic, Gregory Blue, Anouar Abdel-Malek, United Nations University (Palgrave Macmillan) である。その後、*Culture and Thought in the Transformation of the World*, ed. By Aniszzaman Abdel-Malek and Anouar Abdel-Malek, U.N.U. (Palgrave Macmillan) や *Intellectual Creativity in Endogenous Culture*, ed. by Anouar Abdel-Malek and Amar Nath Pandeya, U.N.U. などが続刊され、Anwar ʿAbd al-Malik, *al-ibdaʿ wa-l-mashrūf al-hadarī*, al-Qāhira (Dār al-Hilâl) など、諸言語の形態での刊行物が現れた。このような国連大学での彼の活動を全面的に理解し支持・支援したのは、当時の副学長武者小路公秀（1929年生まれ）だった。

日本において、アンワルの仕事や発言は、さまざまな人によってあまたの出版媒体において翻訳・紹介されたが、彼の中心的な仕事のもっともよき紹介者は、*La dialectique sociale* を翻訳した熊田享（クマタ・トオル 1924～2006）である（『民族と革命』、『社会の弁証法』、いずれも岩波書店、1977年刊）。訳者の熊田は原著者と同年、中日新聞社（東京新聞）記者としてスエズ戦争時のカイロ特派員、六日戦争時のパリ特派員、1970年以降は同社を退職し、パリ駐在嘱託ついで欧州駐在客員としてパリに住み、同地で亡くなり、眠る。藤村信のペンネームをもち、世界に通じ知性溢れるジャーナリストだった。熊田の処女作は『砂漠に渴いたもの—中東 1944～1958』（東洋経済新報社、1959年）。熊田のようなすぐれた紹介者を得たアンワルは幸運だった。

日本の中東研究者では、国連大学で彼が働くまえから親密な交際・交流があっ

たのは、いずれもアジア経済研究所関係者の中岡三益（ナカオカ・サンエキ 1927~2011）、林武（ハヤシ・タケシ 1930~2000）、宮治一雄（1938 年生まれ）といった存在がすぐ思い浮かぶ。わけでも、林武は国連大学でアンワルの SCA とともリンクし合うプロジェクト「日本の経験」の責任者だったから、なおさらだった（林武『技術と社会—日本の経験』、国連大学、1986 年 をはじめ、林武総編集「国連大学プロジェクト〈日本の経験〉シリーズ」が刊行された）。日本中東学会が設立されたとき、アンワルは入会して会員となったが、日本に常住しない外国人会員の取り扱い、そのころまだ確立しておらず、長く持続せずに終わった。

国連大学の任期が切れてから間もなく、彼は立命館大学国際関係学部で特別招聘教授に就任したが、それも長続きせずに終わった。その間、神戸市マリナーパークのホテルを宿として京都に通い、日本の地中海の風光を満喫したようだ。同大学でその招聘の世話にあたった片岡幸彦教授は、本稿で触れたマーティン・バナール『ブラック・アテナ』第 1 巻の邦訳（新評論、2007 年）の監訳者である。

日本社会のワタニーヤに期待を寄せていたアンワル・アブデルマレクは、阪神淡路大震災に続き、東日本大震災・大津波と TEPCO 福島第一原子炉 4 基の過酷事故に見舞われた日本に、そして彼の夢に反して中国と再び事を構えるかもしれない日本に、どんな思いを寄せているだろうか。彼が、世を去るまえに、2011 年初頭タハリール広場の情景に接したのは、それは一瞬の虹と消えたにせよ、せめてもの慰めだった。

（板垣雄三）

## 寄贈図書

### 【単行本】

三島海雲記念財団『三島海雲記念財団五十年のあゆみ』、東京：公益財団法人三島海雲記念財団、2012 年。

宮下陽子『現代トルコにおける政治的変遷と政党 1938~2011——政治エリートの実証分析の視点から』、東京：学術出版会、2012 年。

宮本雅行、Nabil Hilmi Soukar『アディゲ語（西チェルケス語）文法入門』、宮本雅行、Nabil Hilmi Soukar、2012 年。

Ağuiçenoğlu, Hüseyin. *Zwischen Bindung und Abnabelung: Das „Mutterland“ in der Presse der Dobrukscha und der türkischen Zyprioten in postosmanischer Zeit (Istanbuler Texte und Studien 29)*. Würzburg: Ergon-Verlag GmbH, 2012.

Fukami, Naoko and Sato, Shohei (eds.). *Islam and Multiculturalism: Between Norms and*

*Forms*. Tokyo: Organization for Islamic Area Studies, Waseda University, 2012.  
Kalaitzidis, Kyriakos. Post-Byzantine Music Manuscripts as a Source for Oriental Secular Music (15th to Early 19th Century) (*Istanbul Texts and Studies* 28). Würzburg: Ergon-Verlag GmbH, 2012.

### 【逐次刊行物】

『NIHU プログラム、イスラーム地域研究第 2 期研究実績報告書』、平成 23 (2011) 年度、早稲田大学イスラーム地域研究機構、2012 年。  
『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第 26 巻、岡山市立オリエント美術館、2012 年。  
『季刊アラブ』 No. 142、No. 143、日本アラブ協会、2012 年。  
『地域研究コンソーシアム・ニューズレター』 No. 13. 京都：地域研究コンソーシアム事務局、2012 年 10 月。  
『東方学会報』 No. 102、東方学会、2012 年 7 月。  
*Bulletin of the American Research Center in Egypt*. No. 201 (Fall 2012). American Research Center in Egypt, 2012.  
*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. Vol. 75, No. 2 and No. 3. Cambridge University Press, 2012.  
*Dimensions International*. Saudi Aramco, Winter 2011 and Summer 2012.  
*Perceptions: Journal of International Affairs*. Vol. XVII, No. 3 (Autumn 2012). The Center for Strategic Research of the Ministry of Foreign Affairs (SAM), Turkey, 2012.

## 会員の異動

### 【新入会員】

吉年 誠  
西館 康平  
Hossein  
Ghaffarigorzin  
Steven Martin  
Wright

## 【所属先・連絡先の訂正・変更】

江崎 智絵

宮下 遼

## 連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

石原 忠佳	岩永 尚子	小川 浩史	勝本 英明	河野瀬 功
杉山 佳子	高畑 祥子	武田 朝子	原田 恭介	樋口 義彦
平山 健太郎	細谷 幸子	松尾 晴紀	安永 真理	
El-Mostafa Rezrazi	Arezoo Fakhrejehani			

## 事務局より

今年の冬は大分寒かったと思いますが、ようやく暖かくなってきました。本当なら冬のうちに発行しなければならなかったニュースレターですが、3月まで発行が遅れてしまったこと、お詫び申し上げます。本号で電子化されたニュースレターを発行するのは2回目になりますが、電子化を行った結果、新たな問題が見えてきました。以前であれば、ニュースレターを郵送する時に会費の振込み用紙も同封したため、ニュースレター発行後は会費の納入が増えるのですが、電子化以降（とは言ってもまだ2回目ですが）はそれがなくなりました。その原因のひとつは、個々の会員が何年度まで会費を納入したのか把握できていないためだと思います（実は私自身も把握していません）。出版物の電子化自体は時代の流れとしても、今後は自分の情報（会費納入状況、会誌（AJAMES）受け取り状況、連絡先、所属先など）を学会ウェブサイト上で確認・変更できるようなシステムを構築する必要があると考えます。しかし、それは今後の理事会の判断にお任せすることにしたいと思います。

（新井和広）

## 編集後記

ようやく、あるいはとうとう、私の理事の任期の最後のニューズレターとなりました。この号に日本中東学会立ち上げから尽力されてきた（そして個人的にもお世話になってきた）板垣会員の力のこもった追悼記事を掲載できてうれしいです。



ニューズレターのデジタル化は前号から始まりましたが、ニューズレター上で会員名をクリックすればその人の URL や著書・論文ページに入れるようにしたい、ネット上で会員のフォーラムのようなものを作りたい、さらに学会の外の人とのインターフェースにする工夫がほしい、などの希望は次期理事会に託すことにしたいと思いません。

ふりかえれば No.111 から 6 年間で 20 回編集作業をしたこととなります。忙しい会員に無料の原稿を督促しなく

てはいけない申し訳なさ、大学の学期中で身体がきつい時期でも早朝や深夜にガラづくりをしなくてはならないしんどさから解放されるのは嬉しいのですが、やはりちょっぴり寂しいですね。久しぶりにお目にかかった方に「編集後記、読みましたよ」と言ってもらえることがなくなるわけですから。

しばしばご迷惑をかけた歴代の学会事務局関係者のみなさま、ご寄稿くださった会員のみなさま、そしてニューズレター読者諸氏にこれまでのご厚情を申し上げます。

今後ともどうかよろしく！

(山岸智子)

## 会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。前号からニューズレターを電子化したため、会員の皆様には会費納入用の郵便振替用紙を郵送することができません。お手数ですが、納入済の年度を各自で御確認の上、下記の口座（郵便振替、銀行）に口座をお振り込みいただきますようお願い申し上げます。納入済の年度がお分かりにならない場合は、事務局まで気軽にお尋ねください。AJAMES に未送付分がある場合は、2012 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。

日本中東学会ニューズレター 第130号

発行日 2013年3月5日  
発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒223-8521  
神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1  
慶應義塾大学商学部  
新井和広研究室内  
日本中東学会事務局

電話/ファクス：045-566-1247

Eメール: [james@james1985.org](mailto:james@james1985.org)  
<http://www.james1985.org>

郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）  
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店（普）5346808  
（日本中東学会 代表 臼杵 陽）